## 【　梅雨　】・・・鈴 木

今月 23 日から、東京で 57 年ぶりのオリンピックが開催されます。新型コロナウィルス感染が落ち着いていればもっと楽しい観戦になったのですが…、残念ながら競技観戦は出来そうにないのでテレビでの観戦を楽しみたいと思います。その中でも侍ジャパン（稲葉監督率いる野球）、火の鳥日本（女子バレーボール、宇都宮出身の黒後愛選手が選ばれた）、陸上長距離（新谷仁美選手、田中希美選手）に注目したいと思います。

オリンピックは、梅雨明け（平年だと７月 19 日とのこと）の青天開催を期待しております。とにかく今はうっとうしい梅雨の真っ只中です。嫌な季節ですが、梅雨の時期に使われる梅雨の言葉は意外に多く、季語を使って表現すれば季節の変化を楽しむことができます。そこで、うっとうしい気持ちを吹き飛ばすような素敵な言葉があります。

１つ目は、「空梅雨（からつゆ）」です。空梅雨とは、梅雨に入ったにも関わらずほとんど雨が降らない現象を表す言葉で、晴れの日が続くことから「照り梅雨（てりつゆ）」とも呼ばれ、乾いた印象がある言葉です。２つ目の「梅雨の中休み」は空梅雨と少し似ていますが、一時的に天気が回復して３日程度以上晴れの日が続くことを言うそうです。貴重な晴れ間ですから、何か得した気分の期間です。3 つ目は、梅雨が終わるころを表す「梅雨明け」です。やっと晴れやかな気分になる時期です。是非、オリンピック開会式がこの梅雨明け後になれば良いと思います。

梅雨明け後は、蝉が鳴きはじめる頃でもあり、これからやってくる厳しい暑さがやってきます。それでは、すぐそこにやってくる夏を楽しみに待ちましょう。

## 【地頭の良さ】・・・　小　倉

７月に入り梅雨本番という季節になってきました。
湿気も多いとのことから体調を崩しやすいとも言われていますが、そんな中、季節とは関係ありませんが、地頭の良い人には、とても憧れますし、歳を重ねるごとに大切に思うようになりました。

「地頭の良さ」は、生まれつきの能力や勉強して身に付けるものではなく後天的に身に付くものであり、その人が本来もっている「考える力」がベースといえます。同じ言葉を発しても相手の捉え方により話して良かったと思うこともあれば、失敗したと反省することもあります。地頭とは「その人本来の頭の良さ」で論理的思考力やコミュニケーション能力などを表し、考察力、判断力が優れ自ら考え抜く能力をもっている。

①（知らない物事に対して柔軟に対応できる）　他人の意見や全く想定外の考えも柔軟に取り入れることができるため、広い視野を持つことが出来るのです。

②（相手に合わせて会話ができる）　コミュニケーション能力が高いため、多くの人に信頼され、プライベートでもたくさんの友人に恵まれている。

③（読書が習慣で話題が多い）　子どもの頃から読書が習慣であって知識が広く話題が豊富な人が多い傾向にあります。読書だけでなく、映画や美術など、あらゆる分野でアンテナを張りめぐらせているのも特徴。自然と知識が増え、話す内容も多岐にわたります。

④（物事を掴む力がある）　自分で考える習慣が身についているため、他人の考えや意見をそのまま鵜呑みにすることはないでしょう。一見関係のなさそうな事象から共通点を見出すなど、広い知見から生まれる勘の良さがあります。

人と接することは場合によっては傷つき、諍いになることもありますが、地頭が良い人は、そういう大変さも受け入れ様々なことを学ぶことができる懐の深いところがあると言えるし、そういうメンタル的にタフな所が、仕事やプライベートで役に立ちます。何があっても精神的にへこんだりすることもなく、どんどん次の人に話しかけて良いところを受け入れようとし、繋がりがいかに大切なことを理解してます。

日々の努力で地頭を良くするのは可能です。人は自分とは環境も生き様も違います。そんな異なる価値観の人とも交わり、多様な意見を取り入れるように心がけたいしプラスになる人と関わりを持ちたいと思います。

## 【失敗から生まれたコカ・コーラ】・・・手 塚

世界一多く飲まれている炭酸飲料水をご存じでしょうか？　そうです。コカ・コーラです。ではコカ・コーラの『コカ』の意味をご存じでしょうか？　コカ・コーラのコカはあの悪名高き麻薬の『コカイン』のコカなのです。

もともとコカは、メキシコや南米原産の木で、先住民は宗教儀式や痛み止めとしてコカの葉を使っていました。ときは 19 世紀、欧米ではモルヒネ依存症患者が多くなり、その治療薬として登場します。麻薬の治療薬に麻薬とは、ウイスキー依存の治療として焼酎をすすめるようなものですが、当時としては、コカインはそういう立ち位置だったのです。

19 世紀のコカインはそう悪いものとも考えられておらず、名探偵シャーロック・ホームズもコカイン愛用者として描かれ、有名な精神分析医のフロイトなどは自らも使用し、多くの人に強壮剤や憂鬱を吹き飛ばす魔法の薬として、多くの人に勧めたりしていたほどです。

1885 年、アメリカの薬剤師ジョン・S・ペンバートンはモルヒネ依存症やうつ病の治療薬として、フレンチ・ワイン・コカを開発。これはワインとコカインの混合物でした。ところが、当時アメリカでは禁酒運動が盛んになり、フレンチ・ワイン・コカもアルコールを含んでいるため攻撃の的に。そこでペンバートンがお酒を含まない飲料として、コカ・コーラを開発するのですが、ここでもわかるように、当時はコカインよりもお酒の方が悪者だったのです。ペンバートンは、お酒を含まないコカイン入りの治療薬の研究することになるのですが、そこで目をつけたの「コーラ」です。コーラはアフリカ原産の樹木で、その実にはカフェインが含まれています。ペンバートンはコカイン＋コーラエキスで新しい治療薬を創ろうとしたのでした。

しかしなかなかうまくいきません。味は悪くないので、失敗作に冷たい水を入れるように助手に指示すると、助手も冷たい水と炭酸水を間違えてコップに入れてしまいます。しかし飲んでみると美味しい。これがコカ・コーラの誕生した瞬間でした。失敗作に助手も間違えて入れた炭酸水、二重の失敗という偶然から生まれたのがコカ・コーラだったのです。コカ・コーラは最初、薬局で売られていました。当時は薬局で、コカ・コーラの原液を炭酸水で割って薬局の片隅で飲むものでしたが、それでも人気が出るようになりました。

またこの時代に薬局以外でも飲めるようにと瓶詰にして売るようになります。そしてその時代、ようやくコカインの害に気が付いた人たちが、お酒より安価で子どもでも飲めるコカ・コーラを非難するようになり、コカ・コーラ社はコカイン成分を抜くことになります。これでコカ・コーラは健全な飲み物として全米、そして全世界に広がっていくのです。

日本にコカ・コーラが入ってきたのは、大正時代。高村光太郎の『狂者の詩』という作品にコカコオラ、THANK YOU VERY MUCH　銀座二丁目三丁目、それから尾張町　電車、電燈、電線、電話 ちりりんちりりん“というものがあります。銀座というおしゃれな街、電車、電燈、電線、電話という時代の最先端ものと一緒に出ているというところがいかにも大正モダニズムといったところですね。そして昭和 24 年（1949）、それまで輸入品だったコカ・コーラの国内製造がはじまります。昭和 37 年（1962）、広告活動をはじめ「スカッとさわやかコカ・コーラ」というテレビ CM は一世を風靡しました。

いかがだったでしょうか？　いまや世界一の炭酸飲料となったコカ・コーラの歴史でした。二重の失敗とか、最初は薬だったとか意外な歴史があったかもしれません。身近な飲食物にも意外な歴史や文化があったりするものです。企業経営も失敗から成功が生まれることは多々あります。失敗を恐れずチャレンジを続けることが大切なのではないのでしょうか。